

大阪府美術研究討議会 高学年 A

① 地区名 南河内地区

② 授業者 坂本 丈弥 羽曳野市立 羽曳が丘小学校

成井 彩映子 寝屋川市立 和光小学校

司会者 山本 奈未 羽曳野市立 駒ヶ谷小学校

記録者 金田 大輝 羽曳野市立 西浦東小学校

助言者 石井 理之 大阪成蹊大学

③ 授業者より

「ひもひもジャングルワールド」

『造形遊びにすすんで取り組み、楽しむことができる、材料・素材の良さをいかしてジャングルをつることができる、自分なりに工夫してジャングルをつることができる』という、めあてを設定した。前時では、「ジャングル」についてのイメージを広げ、素材を使って表現し、役割分担を決め、本時につなげた。児童同士でのコミュニケーションや活動に対する姿勢を加味して、子どもたちの自由な発想を大切にしたいという考えもあり、言葉がけが難しかった。主体性を重んじた造形遊びだったか、という点に課題が残った。



### 「ミラクル!ミラーワールド」

『試したことなどを生かして、自分がよいと感じる鏡の世界をつくる』という、めあてを設定した。

児童自身が自分の「イチ押しポイント」を紹介できるよう ICT を導入したことで、自分の考えを表現しやすくなり、児童間でのコミュニケーションが活発であった。「貼る」活動において、セロハンテープに頼ってしまうことが多かったので、他の貼り付け方を提示する必要があるがあった。時間配分が難しかったこともあり、ふりかえりまで到達することはできなかったが、子どもから「まだやりたかった」と発言も出ており、さらに工夫したいという気持ちが膨らんでいた。



#### ④ 質疑応答内容

「ひもひもジャングルワールド」

Q 材料の豊富さ・入念な準備を行っていたことで、子どもたちはよりワクワクして授業に臨んでいた。

せっかくつくったジャングルワールド、作った空間をどのように形に残すか。

A 部屋の紐・ジャングルを表現していたものを、2つのポートに貼って光るようにする。

Q 準備物を十分に用意していたことで、「こんなものをつくるかな」という想像が先生の中であった

かと思われる。その想像を超える子はいたか。

A 概ね想定通りだった。大人の言葉がけがあったからこそである。

「ミラクル!ミラーワールド」

Q 鏡の特徴を意識し、子どもたちも奥行きを使えていた。振り返りをしたなら、どのようなところに焦点をあてておこなったか。

A ロイロノートを用いての絵や感想、自分の一番頑張ったところを振り返りとしておこなう予定であった。

Q 第一次では、鏡を使ったいろいろな「見え方」を試したとあるが、どんな「見え方」が出た？

A 導入として、「きょうのおやつは？」という本を用いながら引き付けることで、奥行きや見える数の増加、シンメトリーな文字などに関する発言が出た。

#### ⑤ 指導助言内容

授業全体を通して、2 学級ともに「もっとやりたい」という思いが伝わった。造形遊びでは準備の充実さで子どもたちの満足感につながる 것이大きい。評価においては、1 時間ですべてをみとるのは難しいと考えられる。それゆえ、ICT 端末を用いて振り返りを行うことで、作品の可視化が行いやすくなるという反面、技能においては、その場で評価せざるを得ないこともある。時にはルーブリック評価を適切に用いることで、お互いの納得感を重視して、評価に臨むことができる。大学の講義とは違い、子どもたちは図画工作科を行うことが専門ではない。どうすれば大多数の満足感を得られるのかという視点を備えながら、ふだんの授業を行いたい。